



TITLE:

# 野外で見られたアンドンクラゲ(立方クラゲ綱, アンドンクラゲ科)の生態的希少例

AUTHOR(S):

大石, 博人; 永井, 宏史; 久保田, 信; 上野, 俊士郎

---

CITATION:

大石, 博人 ...[et al]. 野外で見られたアンドンクラゲ(立方クラゲ綱, アンドンクラゲ科)の生態的希少例. 南紀生物 1999, 41(1): 49-50

ISSUE DATE:

1999-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/188272>

RIGHT:

© 南紀生物同好会

南紀生物, 41(1): 49-50, 1999

野外で見られたアンドンクラゲ (立方クラゲ綱, アンドンクラゲ科)  
の生態的希少例

大石 博人\*・永井 宏史\*\*・久保田 信\*\*\*・上野 俊士郎\*\*\*\*

Hiroto OISHI, Hiroshi NAGAI, Shin KUBOTA and Shunshiro UENO: Two rare ecological cases on *Carybdea rastonii* HAACKE (Cubozoa, Carybdeidae) observed in field

わが国沿岸に広く分布するアンドンクラゲ *Carybdea rastonii* HAACKE は、遊泳に適した立方形で、ジェット噴射移動に有効な擬縁膜を備え、透明な傘の反口部にこの類に特徴的な葉状体を形成し、そこから1本ずつ計4本のよく伸長する触手を有する(久保田, 1992; 山田, 1997参照)。本種は、海水浴場などでは姿がよく見えなため、魚を射止めるほどの強力な刺胞で人にも刺傷を与えることでよく知られた立方クラゲ類の一種である(内田, 1970参照)。港湾などで群泳していることも多く、夜間の灯火採集で最初にすばやく寄ってくるのは本種である。

著者らは、本種のクラゲの生態に関して、野外でこれまで観察されたことのない2事例に遭遇したので記録する。

## 1. 少なくとも3日間、入れ子になったアンドンクラゲ (図1)

大石により、以下の状況で、約30個体のアンドンクラゲが群泳していた中で、8本の触手をもった変わり者として発見され、自宅に持ち帰って水槽で飼育し、両者が死亡するまでの3日間観察および撮影された。永井と久保田によってもそのビデオおよび固定標本で入れ子状態が確認された。

発見日時 1998年9月29日午前10時頃(天候 曇)

発見場所 神奈川県三浦郡葉山町一色、柴崎海岸より  
5 m 沖、水深 3 m 地点の水面近く

水槽での遊泳の観察

葉状体を重ね合わせるようなはまりかたで密着し、内側の個体の遊泳により移動(外側のより大型の個体は拍動せず)

2 個体の大きさ(死亡後のホルマリン固定標本で測定)

傘高 約 25 mm, 20 mm

入れ子になった原因

野外で本例のような状態がこれまで報告されたことはなかったが、採集した多数のアンドンクラゲをまとめて水槽に収容した場合、類似した状態におちいることを上野はこれまで数回観察した(未発表データ)。野外で、同一の餌を取り合うことなどが密集状態で流れない状況で起こった場合、本例のような現象が稀に生じるのかもしれないが、真偽は不明。



図1 入れ子になったアンドンクラゲ(海岸で採集)  
Fig. 1. A smaller specimen of *Carybdea rastonii* fits inside the other (collected in a seacoast).

\*〒240-0115 神奈川県三浦郡葉山町上山口864

\*\*〒618-8503 大阪府三島郡島本町若山台1丁目1-1, サントリー生物有機科学研究所

\*\*\*〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町, 京都大学大学院理学研究科附属瀬戸臨海実験所

\*\*\*\*〒759-6595 山口県下関市永田本町2丁目7-1, 水産大学校生物生産学科



## 2. 全体が赤色を呈するアンドンクラゲ (図2)

上野は長年の観察中で、本個体のような例をただ一度だけ発見した。それを実験室に持ち帰り、しばらく観察した結果とあわせて今回記録する。採集地点で本個体の他に見られた多数の個体は無色であった。

発見日時 1991年10月7日午前10時頃 (天候 快晴)

発見場所 山口県豊浦郡豊浦町川棚漁港 湾最奥部水深



図2 全身赤色のアンドンクラゲ (港湾で採集)

Fig. 2. A reddish specimen of *Carybdea rastonii* (collected in a harbor).

約2mの表面近く

水槽での観察

胃腔と放射囊は濃く呈色。葉状体から触手先端まで着色。ただし、間軸部隔壁で薄く、外傘筋肉部は着色なし。飼育開始後、徐々に色あせ、3時間で無色にもどる。なお、胃腔内に未消化物なし。本個体は比較的大形個体。

着色の原因

採集地点のそばに魚類の解体工場と小規模の漁獲物水揚げ場があるので、そこから流失した魚類の肝臓、心臓、血合い肉など血液を多量に含む臓物や肉片などの新鮮なものを本個体に取り込み、消化中の着色個体と推察。これに類似する観察例で、色素を多量に含む稚魚やゴカイ類をアンドンクラゲに投与したところ、胃腔や放射囊が黄色を呈す (上野、未発表データ)。

## 引用文献

- 久保田 信. 1992: 立方クラゲ綱. in 西村三郎編著, 原色日本海岸動物図鑑Ⅰ. pp. 58-60. 保育社, 大阪.
- 内田 亨. 1970: in 内田亨監修, 現代生物学体系 第1巻 無脊椎動物A (第1刷). pp. 68-86, pls. II-IV. 中山書店, 東京.
- 山田真弓. 1997: 立方クラゲ綱. in 千原光雄・村野正昭編著, 日本産海洋プランクトン検索図説. pp. 539-540. 東海大学出版会, 東京.